



「Lightscape colors #1~8」より「#6」
#6, from the series of "Lightscape colors" #1-8

左右2点とも 100×73cm 雲肌麻紙に Dirk Weber 顔料 (独製)、天然岩絵具



「Lightscape colors #1~8」より「#7」
#7, from the series of "Lightscape colors" #1-8

Both 100×73cm, mineral pigment and German Dick Weber pigment on paper



「Shadows」 82×320cm 雲肌麻紙に墨、胡粉、天然岩絵具
Shadows, 82×320cm mineral pigment, witewash and sumi-ink on paper

the Painting looks hollow but has everything at the same time

This "Light" series need particularly long and complex process among his works. Firstly he paints paper with Sumi ink and rubs it. Then lays 20 or 30 thin layers of paints on it with water, and blurs them by Chinese brush. He repeats this process before the very limit that color losses brightness. While this long process, his self come to disappear and the work itself become an objective existence for him. To say, he works quite actively on the painting, but works finally do not have any sign of his action.

He says "My goal of painting is it of having nothing and everything at the same time." And my works do not finish within themselves, but making the space working interactive with the people and things around them.



くぎまち あきら
1968年神奈川県生まれ。95年多摩美術大学大学院修士課程絵画科日本画専攻修了。95~96年マルセイユ・フランス国立美術学校。99年度パリ第8大学大学院メティアアート科修士課程修了。2000~02年文化庁在外派遣芸術家としてパリで活動。現在、パリ在住。
Akira Kugimachi
Born in Kanagawa, 1968. Graduate Tama Art University in Tokyo (M.A) in 1995. Studies at Ecole des Beaux-arts de Marseille in Marseille from 1995 to 1996, then graduate University Paris 8 (Fine art) in Saint-Denis (M.A) in 1999. Fellowships, Agency for Cultural Affairs Government of Japan (Paris, France) from 2000 to 2002. Recently lives and works in Paris.

かし、その中身は尽きる事がない。」というのは老子の言葉ですが、私が目指す絵画とは、何もなく、同時にすべてがある、というような作品です。また、それ自体で完結しているものではなく、つねに環境や人とのインタラクティブな装置となる場をつくる絵画です」
絵画に対するスケールの大きな概念が、今後ひとつひとつ具体化されることを楽しみにしている。

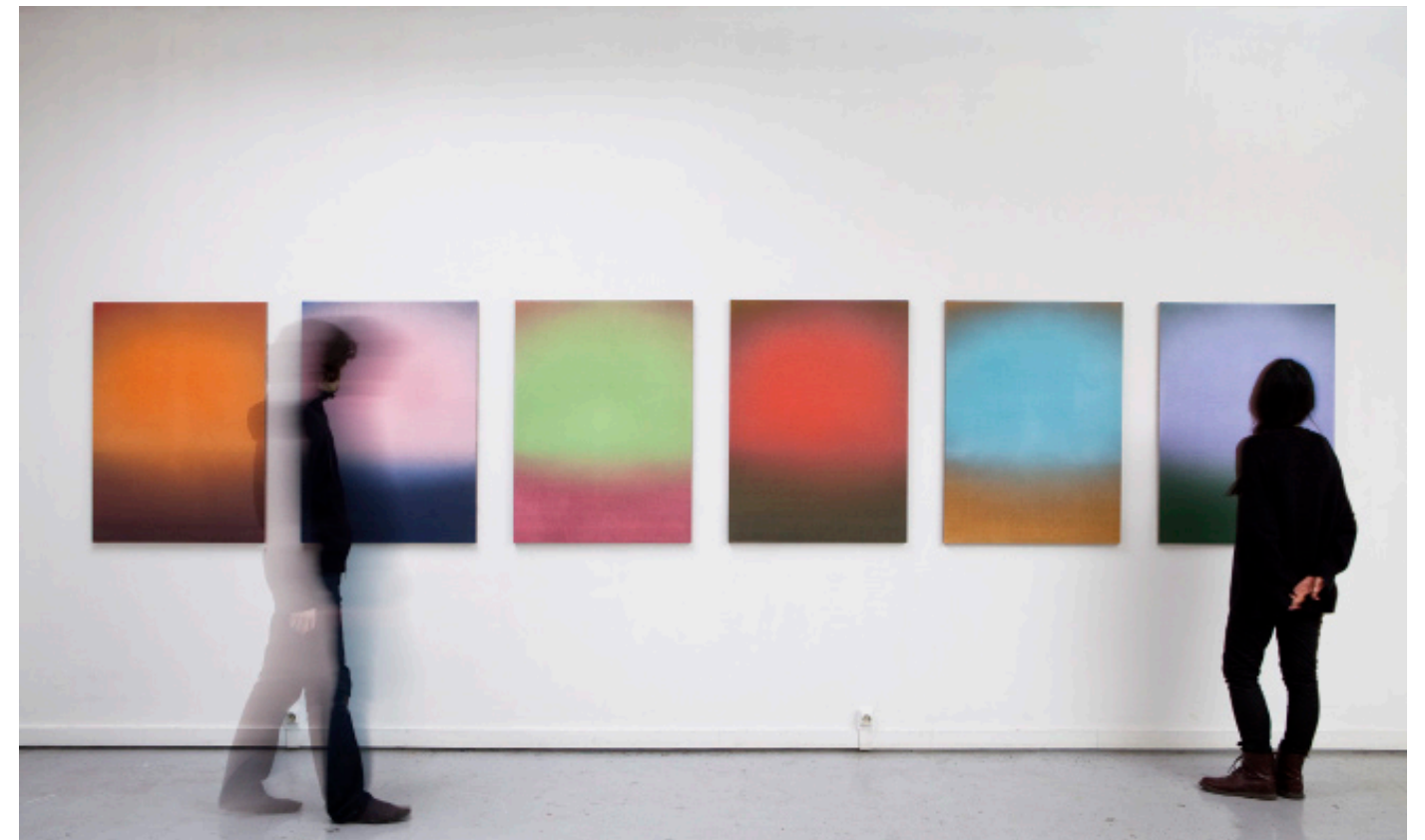
DATA

山下画廊 YAMASHITA GALLERY
東京都中央区銀座7丁目7番地15号 HARAビル1階
HARA bldg., G/F, 7-7-15, Ginza, Chuo-ku, Tokyo
TEL: 03-5537-8787 FAX: 03-5537-8785
E-mail gallery@g-yamashita.jp
http://www.g-yamashita.jp

CLOSE UP 2 A12 山下画廊 YAMASHITA GALLERY

釘町 彰展

Akira Kugimachi: Lightscape colors series



何もなく、 同時にすべてがある絵画

2008年、売売を記録した「アートフェア東京」での個展から3年、パリ在住の画家、釘町彰が再び山下画廊ブースで個展を開催する。

今回のテーマは「光」。「Lightscape colors #1~8」と題した8枚のタブローをひとつの作品として構成するが、それは一枚ずつでも成立する。

「光は温度や時間帯、あるいは地域といったさまざまな環境によって、また見る側によって変化するものです。8枚全体を見せることで、時間帯や温度の推移を表したいと思ったのです」

これまでと同様、余分な要素を省いたシンプルな画面構成だ。しかし大きく違う点がある。それは、これまで使ったことのない色を多用していること。これまでの天然顔料による淡い色味から大きく転換し、鮮烈な赤、あるいはシヨッキングピンクといった、人工的な色までが登場する。これらにはドイツ製またはアメリカ製の、天然ではない顔料も含まれている。

こういった色の変化の持つ意味は大きく、単なる画材の変化ではない。

「これまで主題としてきた自然の起源というところから一歩踏み出して、光とヴィジョン、あるいは見る事そのもの、つまり絵画や写真という媒体そのものの共通の主題への移行を考えたのです。見ただけで美しい天然顔料が武器である日本画の世界から、敢えて脱却する試みとも言えるのです」

もはや釘町は自作について、「日本画」という限られた枠で考えていない。

ウォーホルのシルクスクリーンの色合いからインスピレーションを受けたというこのシリーズは、最初、欧米市場に向けて制作された。たしかに、同様の図像を発色のない鮮やかな色合いで連作せる方法論は、ウォーホルのシルクを思わせる。だが、釘町の場合、あえてぶつけ合させた異なる色と色が喧嘩することなく、不思議な調和と親和性を生み出し、相互色間の微妙なグラデーションが一種の不確実性を醸し出している。それらは我々の五感に直に届き、記憶の奥底の感覚を覚醒させるようだ。森羅万象には、人間の想像を遙かに超えた色が無限に存在するが、それに似た超越的なエネルギーが宿っている。だからこそ見る人はその画面に向き合うだけで、遠くの世界へと連れ去られる。

釘町が続けるシリーズの中でも、この光のシリーズの制作工程はとりわけ長くて複雑なものだ。和紙に墨を塗り、揉み紙をした画面を出発点に、あらかじめ水を吹きかけた画面に薄く絵具の層を20回、30回と重ねて唐刷毛でぼかす。この作業を繰り返して、これ以上重ねると発色が落ちるといった限界まで繰り返して完成する。こういった作業工程のうちに、釘町の自我も消えてゆき、作品は客観的な存在と化する。きわめて能動的に作業を進めながらも、完成作からは、その痕跡が見えはならない。

「大空(たいそら)しきが如し(本当に満ち足りているものは一見空虚に見える。し